

EJP (Experience Japan Program)の概要ー短期交換留学生のための日本語・日本事情講座ー

著者	三宅 和子
著者別名	Miyake Kazuko
雑誌名	東洋大学短期大学紀要
号	26
ページ	17(200)-24(193)
発行年	1994-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012206/

EJP (Experience Japan Program) の概要

－短期交換留学生のための日本語・日本事情講座－

三 宅 和 子

EJP (Experience Japan Program) の概要

— 短期交換留学生のための日本語・日本事情講座 —

三 宅 和 子

1. はじめに

東洋大学短期大学では、かねてより英語圏の諸外国との交換留学制度を計画していたが、1992年2月に最初の交換留学生がアメリカ、ニュージーランドへと飛び立ち、1993年度より本格的交換留学制度が発足した。この制度は短期大学独自の本格的交換留学として注目に値する特徴をもち、今後の発展が期待されている。しかし、発足してまだ日が浅いため、改善や長期的な再構想を必要とする点もある。筆者はこの制度の運営に1993年度より関わり、とくに日本側の受け入れプログラムであるEJP (Experience Japan Program) の責任者として活動してきた。本稿はEJPに焦点を当てながらこの留学制度の特徴を概説し、その成功点、問題点などを指摘する。

2. 交換留学制度の主旨

近年、海外に短期・長期に留学したいという要望は東洋大学短期大学内でもますます高まっている。当交換留学制度は、このような学生のニーズに答えるべく、本学の学生を夏休み・春休み期間に送り出し、大学の正規授業を犠牲にすることなく、海外で集中的に英語を学習する機会を与えることを主眼に設立された。また、在学中に英語力を高めることにより、将来、就職や大学編入、海外の大学・大学院への留学に役立てることも考慮に入れられた。しかし、さらに重要なねらいは、外国で生活する体験を通して、広く外国文化・社会のあり方・考え方を学び、ひいては日本をあらためて知る好機とすることである。そのため、留学はホームステイを原則とし、自然な日常的な英語を使う機会を増やすだけでなく、留学先の国の社会や文化についても経験と理解を得ることができる配慮をしている。

いっぽう、交換留学先の大学はこの制度でどのようなメリットが得られるであろうか。海外諸国では、発展の一途にある日本経済を背景に、日本への関心が高まっている。日本語を学ばべきだという語学熱も高まり、近年、大学に日本語の講座や授業があるのは珍しいことではなくなっている。本学と交換留学協定を結んでいるMaryville University (メルビル大学、アメリカ)、Douglas College (ダグラス大学、カナダ)、Unitec (ユニテ

ック工科大学, ニュージーランド) の3校にも, それぞれ日本語の講座が置かれている。日本語はこれらの国ではつい最近まで注目を浴びることのない言語であったが, 近年日本との経済的結び付きを押し進めているニュージーランド, カナダの両国ではとくに, 日本語のクラスの開設が相次いでおり, 将来的な展望にたって日本語が使える人材の育成に力を入れつつあるといえよう。しかし, 学生が日本語を学外で実際に使ってみる機会はほとんどなく, 日本の社会を肌で知る機会もないのが現状である。従って, EJPのように授業料とホームステイの双方が互換できる制度は将来的にますます魅力のあるものとなると思われる。とくに, 世界最高水準の物価高にあえぐ東京に2カ月間宿泊と食事が無料で滞在できるメリットは大きい。また, 夏休み期間に入る6—7月に来日するため, 通常の授業に混乱をきたさず, 2カ月間, 日本語を中心に日本文化・社会, その他さまざまな日本の側面を学習・体験することができるのである。

3. 交換留学の実際

本学では上述したように, 現在, 以下の3カ国3校と協定を結んでいる。

Unitec (ユニテック工科大学), New Zealand

Maryville University (メルビル大学), U. S. A.

Douglas College (ダグラス大学), Canada

以上のうち, メルビル大学とユニテック工科大学には本校から2, 3月に2カ月留学して英語の授業を受けるが, ダグラス大学には8月の1ヶ月のみの留学となっている。いっぽう, 協定校からは, 6, 7月の2カ月間本校に留学し, 日本語の授業を中心に組まれた講座を受講する。1993年と1994年に交換された留学生の数を以下に示す。1993年のユニテック工科大学は全8週間の講座に4人ずつ2回に分けて送ってきたので, 延べ8人となっている。また, ダグラス大学の場合, 両校の学期休みがうまく合致しないため, 1993年には本校から1名のみ8月に, ダグラス大学からは6, 7月に1名来日したが, 相互の学生の負担を等分化するため, 7月分の滞在費はダグラス大学から払ってもらった。1994年には本校から2名を8月に送り, ダグラス大学からは6, 7月に1名留学して均衡を保った。メルビル大学は本校の留学生数と現在のところバランスがとれておらず, 1995年以降に数のバランスを計らなければならない。

1993年

	Maryville	Douglas	Unitec	計
	1	1	8	10
東洋	5	1	5	11

1994年

	Maryville	Douglas	Unitec	計
	2	1	5	8
東洋	1	2	5	8

4. E J P (Experience Japan Program) の内容

このプログラムはその名が示唆するように、日本に来た留学生在が2カ月間という短い期間に日本語を中心にさまざまな日本を体験、学ぶという趣旨のものである。現在のところ、協定校から来る留学生の日本語のレベルが初級段階のため、日本語の授業は日本語で、その他の活動は英語を中心に行われている。したがって、プログラムの内容は、「できるだけ多くの幅広い日本体験を」ということを念頭に作られている。しかし、交換留学がさらに盛んになれば初級以上の学生がやってくることも考えられ、その際にはプログラムの内容も変更していかなければならないことはいうまでもない。

このプログラムは1993年度の反省をもとに1994年度は改正されたが、大筋においては同じである。以下に1994年度の概要を示す。

4-1. 期間とスケジュール

期間：1994年5月28日（土）～1994年7月21日（木）

スケジュール：

- 5月28日（土） 開講式，オリエンテーション，歓迎パーティー
- 5月30日（月） 授業開始
- 6月6日（月） 学祖祭（休講）
- 7月8日（金） } 日光・板倉旅行
- 7月10日（日） }
- 7月20日（水） 修了式，歓送パーティー*
- 7月21日（木） 実質的授業終了

*予定では7月21日（木）まで授業を行い、7月22日（金）に修了式，歓送パーティーを行うはずであったが、ニュージーランドの学生の都合で早めに終了した。アメリカ，カナダの学生は7月21日にも授業を行った。

197 (20) EJP (Experience Japan Program) の概要

4-2. 授業時間割

月	火	水	木	金
日本語 10:00～11:00 1304*	日本語 10:00～11:00 1211	日本語 10:00～11:00 観光実習室	日本語 10:00～11:00 観光実習室	学外活動
日本語 11:10～12:10 1304	日本語 11:10～12:10 1211	日本語 11:10～12:10 観光実習室	日本語 11:10～12:10 観光実習室	
昼休み (12:10～13:00)				
日本語 13:00～14:00 図書館共同研	日本語 13:00～14:00 142	日本語 13:00～14:00 観光実習室	日本語 13:00～14:00 観光実習室	
日本事情 14:10～15:10 図書館共同研	日本事情 14:10～15:10 142	日本事情 14:10～15:10 観光実習室	日本事情 14:10～15:10 観光実習室	

*時間の下の数字および名称は教室名を示す。

4-3. 授業内容

時間割からも分かる通り、E J P の授業は大きく、①日本語、②日本事情、③学外活動の3つに分かれる。

①日本語

E J P の主要部分である。月曜日から木曜日の週4日、午前10時から午後2時までの3時間、日本語の授業を行った。講師には外部から二人の非常勤講師の先生をお願いした。筆者は総責任者として、授業内容から進行まで二講師とたえず連絡を取り、学習者の進歩や反応を把握した。講師および教科書・教材を以下に示す。

講義担当者：長能宏子（月・木）（非常勤講師）

細田貴子（火・水）（非常勤講師）

教科書・教材：Japanese for Everyone（学研）＋テープ

はだしのゲン（ビデオ）

雪女ほか（紙芝居）

その他自作のプリント多数

学習者のレベルは初級で、学生はなんらかの形で日本語を勉強したことがあるが全員まだいわゆるfalse beginnerといわれる域を出ていない程度であった。まったくの初心者と考えてもいいような学生も含まれていたため、平仮名、片仮名もほとんど読めない学生と、漢字以外はかなり読める学生が席を同じにする状況となり、授業のテンポを設定するのがかなり困難であった。

留学生のスピーキングの力を向上させ、同世代の日本人との接触の機会を増やすために、日本文学科の学生による語学ボランティアグループを作り、日本語授業や4限目の語学アクティビティーの時間に講師の補助をしてもらった。これは留学生にとくに好評であった。

概して学生の出席率はよく、授業を楽しんでいたが、教師と学生のフィードバックから、予習・復習の時間はあまり多くとっていなかったことがわかる。学生に共通する最大の悩みはホームステイ先からの通学時間が長いことであり、満員電車の状況や日本の夏の蒸し暑さも学生の予想を遥かに越えていたようである。そのため、毎日が思うように使えなかったのは事実である。この問題に関しては日本側からあまり改善の余地がないため、日本語の授業の位置づけや内容を今後検討し、留学生に無理がなく、多くを学んで帰れるような充実した授業にしていかなければならないと考える。

②日本事情

日本を理解するには日本語という言葉の勉強も大切だが、そのほかにもさまざまな日本社会の側面について学ぶ必要がある。そこで日本についてのきわめて基本的な知識を身につけることをねらいとして日本事情というコースを設けた。月曜から木曜の4限目の1時間である。本学の教員が英語で講義するというのが前提であったため、担当できる教員の数と講義の内容には当然ながら偏りがみられる。教員の専門や興味のあることがらに関して講義してもらうものに加えて、基本的に知っておくべき知識と思われるトピックを盛り込んで以下のような講義を組んだ。設定した曜日に規則性がないのは、それぞれの教員の都合に合わせて講義の日を決めたからである。また、日本事情のない日は日本語の講師が授業と関連させたアクティビティーや特別な授業を組んだ。

5/31（火）	三宅和子	日本の地理
6/1（水）	吉田収	日本の哲学と宗教
6/7（水）	三宅和子	日本の歴史

195 (22) EJP (Experience Japan Program) の概要

6/8 (木)	原 康	内からみた日本, 日本株式会社論
6/13 (月)	村松友次	俳句
6/16 (木)	加藤美恵子	日本の陶器
6/23 (木)	N. ランバート	異文化交流
6/29 (水)	喜田慶文	日本の社会と言語
6/30 (木)	加藤美恵子	着物—四季折々
7/5 (火)	三宅和子	日本の伝統芸能
7/6 (水)	松園俊志	日本の観光
7/12 (火)	三宅和子	日本人の祝祭と人生
7/14 (木)	岩本 一	書道
7/15 (金)	宮内敦夫	日本文学と歌舞伎
7/19 (木)	宮内敦夫	日本人と西欧人の国民性

③学外活動

教室外の生きた日本にも広く触れることをねらいとして、学外活動を設けた。学生にはできる限りさまざまな日本の側面をみてもらいたかったが、現在のところ予算の関係で活動の範囲は限られている。しかしながら、1993年度に引続き、板倉町のホームステイおよび日光旅行が実現し、留学生に好評であった。また1993年度にはなかった歌舞伎鑑賞も実現した。

6/3 (金)	東京タワー, 六本木
6/10 (金)	江戸資料館
6/14 (火)	茶道
6/24 (金)	明治神宮, 原宿
6/29 (水)	華道
7/8 (金)	板倉, 日光
7/10 (日)	
7/15 (金)	歌舞伎

5. 反省点

EJPは2年目の終わりにさしかかり、少しずつ軌道に乗り始めたといえよう。現在ユニテック工科大学は留学生の人数を今後増やしていきたい意向を表明しているし、本学と

協定を希望する大学も増えつつある。後は留学時期、期間、交換事項など、具体的な面で互換が成り立てば協定校と留学生の数は増えるはずである。このように、交換留学の将来は開かれている。しかし、現状で抱える問題点、反省点もある。以下、項目別に概観したい。

①期間とスケジュール

本学の受け入れ時期としては6、7月の2カ月がいちばん無理のないものであろう。また、本学の学生の留学時期としても、2、3月が適当であろうと思われる。しかし、カナダの大学の場合、2、3月が学期の中途であるため受け入れが難しく、本学からは8月の1カ月間が留学時期になっている。7月は本学が学期中であり、9月はカナダで新学期が始まるためである。1カ月の留学期間では十分な成果が期待できないという問題点が指摘されている。今後さらに協定が進んで単位の互換まで考えられるようになれば、長期の留学、柔軟な期間の設定なども可能になろう。来日留学生の滞在期間も今後要望に応じて変更されることが考えられるが、そのような拡大を期すには、このプログラムが教員の自発的活動という域を越えて常時担当者がいるような確固とした組織にならないといけないと思われる。

②授業内容

日本語の授業に関しては、学生のレベルやモチベーションの程度を鑑み、使用教科書の変更が必要と考えられる。現在使っている教科書 (Japanese for Everyone) は各課ごとに盛られた学習項目が多く、日本語の学習のみを目的として来日しているとはいえない留学生には負担になっている。今後、教科書の変更、授業形態の改変が必要であろう。今年度は日本語講師二人で授業を行ったが連携もよく、この人数が適当と思われた。しかし、EJPの核と思われる授業を非常勤講師が受け持つこと自体、将来的には再考しなければならない問題であろう。交換留学の協定が増え、さまざまな留学生が来るようになれば現在の体制を変え、専任の教師をおく必要が生じるであろう。

学生と日本語講師のフィードバックから、日本語の授業は1日に3時間というのが学生の許容範囲いっぱいであると考えられる。4限目はラボなどの自習形態にするか、その際、日本事情はいつやるか (これまでの内容と種類が適当かは別にして、日本事情は必要である) を考えなければならない。日本事情の授業が一部の教員の負担を前提に成り立っていることも再考の余地があろう。

また、金曜日の学外活動も今後の見直しが必要である。現在のところ予算が過少であるため、必ずしも最良と思われる活動ができないこと、留学生に経費を負担させざるを得な

いケースが多いこと、引率など教員・事務室の負担が大きいことなど、問題点が多い。

③ホームステイ

アメリカ、カナダ、ニュージーランドへ行った本学の留学生の家庭が来日留学生のホームステイ先となっている。この制度は来日留学生にたいへん好評で、全員がホームステイ先の家族の暖かさ、援助に感謝している。留学生にとっては日本人の日常生活を体験し、日本人の考え方、生き方を理解するきっかけともなる貴重な体験である。また、困ったときなどは本学の学生が英語で力になってくれるという安心感も得ることができる。問題点として考えられることは、留学生に一部屋を提供できるような家庭が都心付近にはあまりないため、ホームステイ先が通学に遠い地域になることが多く、慣れない留学生の負担となっていることがあげられる。また、本学生の側からいえば、一部屋提供できなければ留学の機会が与えられないという不平等感が拭いきれない。このことに関しては、留学生の選考とホームステイ先の選考を別途に行うべきという意見もある。いっぽう、協定校側では、学生が親の家から通っているケースが少なく、ホームステイの互換は難しい状況がある。今までのところ、互換が無理な場合は他のホームステイ先を捜して入ってもらおうか、寮に入ってもらい経費を払うかしているが、今後の進展によっては再考すべき問題をはらんでいる。ホームステイの互換は基本的にはきわめて有益な制度であるため、今後もよい方向に改善していきたい。

6. おわりに

以上、交換留学制度のなかのEJPに焦点を当てながら、その内容を概観し、問題点を指摘した。やっと2年目を終えようとしているこの制度は、学内の教職員のアイディアと行動の中から生み出されてきたものである。現在でもさまざまな問題をかかえていることに変わりはないが、少しずつ形を整えてきつつある。さまざまな歯車が噛み合わなければスムーズに動いていかない大きなプロジェクトであることは事実であり、それだけに教職員間の協力と努力のみならず、制度、運営上の改善が必須といわなければならない。

付記

このプログラムは海外研修小委員会のメンバーで運営され、そのほかに学内の先生がたに日本事情等でご協力いただいている。また、日本文学科の語学ボランティアや進んで協力を惜しまなかった学生、教職員にこのプログラムの成功は負うところが大きい。これまで努力を傾けていただいた方々に深く感謝するとともに、今後のいっそうの努力と交換留学制度のますますの発展を祈りたい。なお、本稿記載上の責任はすべて筆者一人にあることはいふまでもない。